学位論文要旨

観光を通じた災害復興の可能性とその形成要因に関する研究

：インドネシア・ムラピ山噴火災害（2010 年）を事例に

間中　光

四国学院大学社会学部　助教

和歌山大学大学院観光学研究科　博士後期課程　単位取得退学

近年、日本社会及び国際社会にとって重要な課題となっている災害復興では、その優良事例や復興支援に関わるノウハウの蓄積が大きな課題となっている。この課題性は観光にとっても無縁ではなく、2015 年 4 月に発生したネパール地震など、「観光を通じた災害復興」に関する知見が強く求められる事例も多い。そこで本稿では、被災地で行われる観光の現状について 2004 年のインド洋大津波、2011 年の東日本大震災の事例を中心に整理し、災害復興における観光の可能性と課題について考察する。そして、明らかになった可能性と課題を分析する枠組みとして、ダークツーリズム論を中心に既存研究を批判的に検討し、その限界性を指摘する。その上で、「騒乱・擾乱などのショックに対し、システムが同一の機能・構成・フィードバック機能を維持するために変化し、騒乱・擾乱を吸収して再構築するシステムの能力」と定義されるレジリエンス概念を援用した新たな分析枠組みを提示した。

次に、被災を起因とした観光展開の分析を通じ、観光を通じた災害復興の可能性と課題を明らかにする。具体的には 2010 年のインドネシア・ムラピ山噴火災害によって全戸焼失の被害を受けた山村を対象とする。まず、復興過程を時系列的に分類し、各段階における観光事象の展開とその影響について明らかにした上で、被災後の社会変動とその対応において、観光が果たしうる役割とその課題について考察した。結果、観光はボランティアツーリズムによる直接的な生活再建への貢献､及び被災地観光の生み出す収益による経済的貢献の 2 点について復興に寄与できる可能性を有していること、同時に、生み出された観光収益の限定性という課題が存在することを明らかにし、その上で、観光という営みが、災害復興という名の急激な社会変動の中で地域産業の回復を下支えする特質を有している点を指摘した。そして、それらの考察を通じ、被災地の観光とは、被災後の急激な社会変動の中で、観光の諸相・要素がせめぎあい・交じり合ながら形成される動態的なものであること、被災地のダークネスもその形成要素の一つに過ぎず、表出する内容・方法も復興過程の中で変動しえることを示した。

最後に、同災害において展開された「代償や埋め合わせを確保する生活戦略」を事例に、こうした生活戦略がいかにして形成されたのかを明らかにする。具体的には、新たに生成さ

れた観光事象の収益化を通じその埋め合わせを試みる被災者たちの生活戦略に注目する。そしてこうした生活戦略を可能にした社会的条件の検討を通じ、被災からの回復に寄与する地域社会のレジリエンスについて考察した。結果、ムラピ山噴火災害で被災した地域社会では、被災地の観光に関し、外部からの参入を制限・排除するのではなく、むしろ相互作用の中で創造される新たな機会を、既存の社会構造を活用して自らの関係性の中に取り込んでいくことで観光を通じた災害復興を果たしていたことを明らかにした。

そして、こうした点を踏まえ、ムラピ山噴火災害の復興過程から見出せる地域社会のレジリエンスとは、創発的な状態を生じさせうるほどに外部に開かれており、その恩恵を内部に浸透させうるほどに閉じている社会特質であることを示した。

Abstract

Study on the potential and formation factor at the disaster construction through tourism ：the case of a disaster caused by the 2010 eruption of Mt. Merapi, Indonesia

Hikaru Kenchu
Assistant Professor,
Faculty of Social Sciences, Shikoku Gakuin University

Disaster reconstruction is currently an urgent research agenda worldwide, for which an accumulation of good practices and know-hows for support is urgently required. Among those, as evident in the April 2015 Nepal Earthquake, many cases demand a knowledge and understanding of the disaster reconstruction through tourism.

This research was conducted in three main stages, each responding to the specific purposes. It first analyzed the recent cases and the studies of tourism in disaster-affected areas with a focus on the 2004 Indian Ocean Tsunami and the 2011 Great East Japan Earthquake, which lead to discussion on their potential and problems. The analysis found that in the existing literature, tourism studies generally situate tourism in disaster areas as part of “dark tourism” and analyze the cases within its framework. However, this framework innately contains its limitation as pointed out in this research. In order to fill this gap and further the theory, a new framework was deemed necessary. For this, this study proposed to incorporate the concept of resilience to fill this knowledge gap.

The second purpose of this study was to examine and clarify the potential and

problems of disaster reconstruction through tourism, by analyzing the development of tourism triggered by a disaster. The case examined here is of the villages of Mt. Merapi, Indonesia, all of whose housings were burnt down due to the eruption of the mountain in 2010. This study examined the role and problems of tourism on the post-disaster movement in the society and the response to it by chronologically classifying the process of reconstruction and claifying the development and influence of tourism at each phase of the process.

The third purpose of this study is to examine and clarify the formation of such survival strategies by analyzing the disaster reconstruction from the same disaster, focusing on the sufferers' strategies to compensate for damages through adaptation of the newly formed tourism opportunities. Values of community resilience contributing to recovery disaster damage is discussed.